役目から解かれた令和４年４月の写真

Shun Kitada

北田 瞬 先生

大分県立大分舞鶴高等学校
養護教諭

仲間がいて、共有できる。
取り組んでみたいことは、
みなでバックアップ！！

民間企業でのお勤めや、教育委員会で指導主事としてご活躍されていたご経験のある北田瞬先生に、今回はお話をうかがいました。

<今回のインタビュアー>
望月 昇平
（釧路市立阿寒湖義務教育学校）

先生のご経歴を教えてください！

現在は、大分県にあります、大分県立大分舞鶴高等学校という学校で勤務しています。養護教諭としての勤務は現任校で３校目となり、歴任校は校種でいうと、全て高等学校でした。

養護教諭になる前のお話を少しさせていただくと、社会人としてのスタートは、実は一般企業への就職でした。大学生の頃から、養護教諭になることを決めていましたが、教員になることを見据えて、社会勉強を…と考え、まずは会社員になる道を選びました。その後、期限付きの養護教諭として４年間過ごし、無事に採用が決まり、本務の養護教諭として勤務することができました。２校で計６年間、養護教諭として勤務した後に、県の教育委員会で養護教諭の指導主事として３年間勤務。今年度、再び現場へ復帰できた、といったところが私の略歴となります。

一般企業で勤務されていたご経験は、学校現場でどのように役立ちましたか？

教員や公務員の世界は、一般の企業とは大きく異なります。「教員の常識、世間の非常識」と揶揄されることもありますが、教員の当たり前が世間では通用しないことは多々あります。私はプライベートで企業に従事する人と交流をもち、自分の一般的な間隔を確かめる機会にもなっています。

企業で働いた経験は、教員・公務員がもつ「当たり前」を疑う、といった点で活かされていると思います。

疲れて昼寝する
県庁勤務の頃

先生が養護教諭を目指されたきっかけなどについて、お聞かせください

大学への進学、進路選択を迫られた高校生の頃、将来やりたいことや目標をなかなか見つけることができない中、ふと興味をもったものが、高校３年生の頃、授業の中で触れられていた「心理学」でした。心理学を学ぶことができる大学への進学を果たし、カウンセラーや心理士への憧れを漠然ともっていました。ふとしたタイミングで自分が思っているよりも、保健室には心理的な悩みを抱えて来室する児童・生徒が多いことを知り、自身の中で養護教諭への関心が高まっていきました。大学４年次の教育実習で、単なる興味が「これだ！」という確信に変わり、そこからはこの想いがブレることはありませんでしたね。

当時も圧倒的少数派であった、男性の養護教諭を目指す中で、周囲の反応はどのようなものがありましたか？

当時勤めていて親交の深かった会社の同僚や先輩からは、「やめておいた方がいいんじゃない？」といった声が多く聞かれました。マイノリティへの偏見などではなく、どちらかというと「（そもそも狭き門の男性養護教諭に）なれるかどうかなんて分からないから、やめておいたら？」といった、心配してくれる声が多くありました。

ですが、期限付きの養護教諭として学校で勤務を始めた頃の周囲の先生方の反応は少し違っていて、どちらかというと、マイノリティな存在である、男性養護教諭という異物への心配。「そもそも、男性ってなれるの？」といった反応もチラホラみられました。反対に、生徒たちは特に抵抗を感じることもなく、すんなり…。ある種の「あるある」ですよね。子ども方が、ニュートラルに接してくれて、大人の方がアレルギー反応を起こしてしまう、といったような。

現任校　保健室にて

先生が感じられている「養護教諭」という職業への魅力を教えてください

そうですね。養護教諭って、心と体の健康を支えていくことができる仕事で、陰ながらサポートをする中で子どもたちの成長を身近に感じることができる。成長に関わることができる幸せを強く感じますね。

また、担任の先生方と協働しながら、自らの専門性を発揮して保護者にもアプローチをしていくことができるという点。適切な支援につなげることが、職務としてできる点にも、やりがいを感じますね。

先生が考えられている「今後の展望」について、是非お聞かせください！

展望…ですか。展望というまで頭と心に余裕が全然なくて。（笑）

そもそも、振り返ってみると、自分が指導主事として働くということを当時は全く想像していなくて。現場から離れて教育委員会へ出向き、「いざ！」というタイミングで新型コロナウイルス感染症が大流行し、日々対応に追われていました。とにかくがむしゃらに駆け抜ける中であっても、感じていたことは、「養護教諭の基本に立ち返らせてもらった3年間であったなぁ」ということ。

こうした経験を経て、改めて初任の気持ちをもって、現場に立っています。久しぶりの現場であるが故に新鮮な気持ちで仕事に向き合うことができており、先程お話したやりがいをより強く感じることができています。なので、まだまだ展望を語れるほど余裕がなくて。（笑）自分の足元をしっかり見つつ、経験年数的（10年目）には後輩の指導といったところにも目を向けるべき立場になってきているので、養護教諭として1つ1つの仕事を基本に忠実に行いつつ、それを人に正しく伝えられるようなスキルを高める…といった、目標といいますか、想いはもっています。

これまで養護教諭の育成は設置者がやってくれる…という人任せな考え方をしていました。自分だけが勉強してできるようになればよいと…。しかし、自分が先輩から多くを学ばせていただいたように、後輩となる養護教諭の資質向上は全ての養護教諭が担っています。それを皆が意識し、自分の実践はいつ誰にでもオープンにできるように日々を過ごすことが重要だと思っています。（自分はまだできていません）

最後に、本会会員のみなさんへのメッセージをお願いします！

私が養護教諭を志し、実際に現場に立った頃、立場を同じくする仲間は私が知る限り周囲にいませんでした。県内でも、近隣の自治体にも、男性の養護教諭は私1人だけ。そのような状況の中で、自分なりにチャレンジと失敗を繰り返し、工夫を重ねてきました。

ですが、今は仲間がいて、悩みや不安、取り組んだ実践などを共有することができます。

イチ養護教諭として、取り組んでみたいことがあれば、友の会としてみなでバックアップしていければと思っています。

個人としても、過去の経験からお伝えできることがあれば、いつでも力をお貸ししますよ！

【男性養護教諭図鑑】
発行：男性養護教諭友の会事務局
編集：長野 雄樹（名古屋市立西養護学校）